第66号　反核医師の会ニュース　2018年1月1日　（6）

反核医師の会ニュース

HANKAKU ISHI no KAI News

Physicians Against Nuclear War(PANW)
核戦争に反対する医師の会
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-5-5
新宿農協会館　全国保険医団体連合会内
電話 03(3375)5121　FAX 03(3375)1885
e-mail: panw@doc-net.or.jp
http://no-nukes.doc-net.or.jp/

結成30年 被爆の実相に立ち返り、核なき世界を

第28回 反核医師のつどい in 東京
30th Anniversary

レセプションにて集合写真

レセプション司会の川村実常任世話人と（左）布村眞季常任世話人（右）

第28回 反核医師のつどい

向山　新　実行委員長（常任世話人）

11月4日5日に、第28回反核医師の集い in東京が開催されました。今年は、反核医師の会結成30年の記念のつどいということで「結成30年　被爆の実相に立ち返り、核なき世界を」というテーマをかかげました。

開催準備の段階では、核兵器禁止条約の検討会議が開催されるのを受けて、どのような運動を進めるかというような話で企画を練っていましたが、7月7日には核兵器禁止条約が採択され、9月20日には50カ国による署名も行われ、さらに10月6日にはICANのノーベル平和賞受賞を決まるという絶妙なタイミングでの開催となり、全国から194名が参加しました。

IPPNW日本支部代表支部長、世界医師会会長に就任された横倉義武日本医師会会からメッセージが届きました。世界医師会として、各国医師会に、核兵器の禁止と廃絶に向けて努力するよう自国の政府に働きかけることを要請したとかかれています。今後の日本医師会の動きに注目したい思います。

また、IPPNW共同代表のティルマン・ラフ氏からはビデオメッセージが届けられました。被爆者の声を政府に届け、政府に圧力をかけるうえで、日本の運動が果たす役割は重要であるとエールを送り、福島第一原発事故の問題についての私たちの運動にも期待を寄せられました。

全体会では、まず反核医師の会結成30年のあゆみについて、中川武夫代表世話人が報告しました。冒頭、核兵器禁止条約の成立について触れ、これで核兵器が無くなるわけではない。批准に向けて核兵器国の圧力がかけられることもあり得る。新たな運動の始まりとして奮闘することを訴えました。

また、ICANのノーベル平和賞受賞について、私たちPANWが日本のICANに参加するなど、団体の一つであり、私たちの活動も評価されたと いえると述べました。喜ばしい出来事の一方で、触れ、核兵器禁止条約を氏からはビデオメッセージが届けられました。被爆者の声を政府に届け、政府に圧力をかけるうえで、日本の運動が果たす役割は重要であるとエールを送り、福島第一原発事故の問題についての私たちの運動にも期待を寄せられました。

全体会では、まず反核医師の会結成30年のあゆみについて、中川武夫代表世話人が報告しました。冒頭、核兵器禁止条約の成立について触れ、これで核兵器が無くなるわけではない。批准に向けて核兵器国の圧力がかけられることもあり得る。新たな運動の始まりとして奮闘することを訴えました。

また、ICANのノーベル平和賞受賞について、私たちPANWが日本のICANに参加するなど、団体の一つであり、私たちの活動も評価されたといえると述べました。喜ばしい出来事の一方で、

真に実効性のあるものにしてゆくために戦い続けることを誓いました。

反核医師の会の30年について、結成から20年までの詳細は、筋肉三先生、児島徹先生の報告に譲るとして、20年から30年までの軌跡を報告しました。

2007年以後の世界の核をめぐる情勢、IPPNW集会や「つどい」の内容紹介されて、2007年にIPPNWを母体としてICANが発足しており、この10年間はまさにICAN運動の歴史に重なる10年間であることが明らかになりました。2011年3月11日の福島第一原子力発電所事故による住民の被曝というかつてない経験をうけて、2011年の全国世話人会以後、原子力発電所、原子力エネルギーの問題について会として取り組むかどのように取り組むかについて討論を重ね、原発問題が会活動の2本の柱として掲げられたのも

この10年の大きな動きでした。

シンポジウム「核兵器禁止条約から核兵器の廃絶を」は、ピースポート共同代表でICAN国際運営委員の川崎哲氏、日本被団協事務局次長の藤森俊希氏、被爆者国際署名キャンペーンリーダーの林田光弘氏を迎えて行われました。

最後に、9月に英国のヨークで開催された第22回IPPNW世界対大会の報告を武田勝文常任世話人、西浜病院の原澤俊也先生が行いました。

懇親会では、前代表世話人の筋昭三先生からのビデオメッセージも紹介されました。

2日目は第1分科会で「ビバクシャは語る、ヒバクシャから学ぶ」と題して、2名の被爆者と相談員の方のお話を聞きました。

第2分科会は、「避難指示解除後の福島は今」と題して、福島の現状についての報告を聞きました。

今年も、医学生が多数参加していました。今後、彼らを若手医師として私たちの運動にどのように迎え入れてゆくのかが、一つの課題であると思います。林田さんに助言を求めると良いかもしれませんね。

第1分科会

本田　孝也　常任世話人

第1分科会は「ビバクシャは語る、ヒバクシャから学ぶ」をテーマに、ビバクシャの児玉三智子さん、久保山榮典さん、東友会で長年ビバクシャとともに歩んでこられた村田未知子さんからお話しを聞いた。

児玉さんは7歳の時、広島の国民学校で被爆した。学校は全壊、迎えにきた父に背負われて家に帰る途中で見た地獄絵図は72年たった今も目の奥に焼きついて消えることがないという。

8月下旬、軽症だった従兄は下痢が続いていたある日、突然、鼻と耳から血を流し、口から血を

吐いて急死した。典型的な原爆症の症状である。

久保山榮典さんは8歳の時、長崎で被爆した。幸い母子4人は爆心地から2kmの地点に避難していたために九死に一生を得た。しかし、父親は直爆を受けて、即死。戦火の中、母親と父を捜しに行き、ようやく見つけた父の遺体をその場で荼毘に付した。

久保山さんは10年後進学のために上京、現在は埼玉県原爆被害者協議会（しらさき会）副会長として核兵器廃絶の活動を続けられている。

児玉さん、久保山さんに共通するのは、戦後も長い間ビバクシャを苦しめ続けた差別と偏見、そして放射能に対する恐怖である。二人の語り部に目を凝らし、固唾をのんで聴き入る参加者の視線が印象的だった。

東友会は東京在住のヒバクシャが1958年に結成した団体である。村田未知子さんは1982年から30年以上にわたって東友会の事務局員、相談員として活動してこられた。現在はノーモア・ヒバクシャ訴訟全国弁護団・原告団事務局も務められている。ヒバクシャの平均年齢は80歳を超えた。語り部の数も年々減り、直接被爆体験を聞く機会も少なくなってきている。ビバクシャに学び、核のない世界の実現を目指したい。

第1分科会

川村　実　常任世話人（反核医師の会ちば）

第2分科会のテーマは、「避難指示解除後の福島は今」と題して、2人の講師をお招きした。

一人目は、生協いいの診療所所長の松本純先生。東日本大震災、福島第一原発故から6年8カ月、いろいろな課題でお話しされた。

まず、避難指示解除後の住民の帰還状況は、解除から半年たっての帰還者数は浪江、川俣、山木屋、飯舘ではまだ10%にも満たないところが多い。復興予算で道の駅や交流センターなど立派な建物はあっても人が居ない。特に若年者は、帰りたいという要望は少ない。人が居なくなり、イノシシなど野生動物が5万頭に増殖した。震災関連死が震災で直接亡くなった数を上回り、食料など放射能汚染基準を下回り流通し、出産数も震災前にレベルになり先天奇形などは全国水準であること

吉澤正巳さん

が報告された。

二人目は、南相馬市小高区と浪江町の境界にある「希望の牧場・ふくしま」の代表理事の吉澤正巳さん。原発から14km、原発が次々水素爆発を起こし、牧場は放射能に汚染され、住民は避難を指示された、家畜も汚染され、売れない牛となった。殺処分を言い渡されたが、牛飼いとして出来なかった。放射線の線量が高いなか、牧草を食み、水を飲み、いつしか脱毛や白斑点が出る牛も出てきた。さまざまな研究機関がやって来て、サンプルを持って行ったが、思うような結果の発表がない。誰か医療機関の先生たちに調査してもらいたいと訴えられた。原発事故の生きた「証人」として330頭の牛たちをこれからも飼い続けると力強く話された。

松本純先生

シンポジウム

核兵器禁止条約から核兵器の廃絶を

代表世話人
原　和人

今年7月に核兵器禁止条約が国連で採択され、9月20日から各国の署名が始まり、50カ国が批准すれば条約が発効するという状況の下、「核兵器禁止条約から核兵器の廃絶を」のテーマで、ICAN国際運営委員でピースボートの共同代表の川崎哲氏、日本原水爆被害者団体協議会（被団協）事務局次長の藤森俊希氏、ヒバクシャ国際署名キャンペーンリーダーで被爆3世である林田光弘氏を招いてシンポジウムを開催した。準備をしているさなかの10月6日にICANのノーベル平和賞の受賞が発表され、その授賞式に川崎氏と藤森氏が参加するという、まさに「時の人」に参加していただいたタイムリーな企画となった。

川崎氏は、最初にICANのノーベル平和賞の受賞にふれ、これはICANという運動が受賞したのであって、その先頭にたって核兵器の非人道性を訴えてきたヒバクシャや反核医師の会を含む多くの市民組織の運動の成果であり、これまで運動を支えてきた人たちに与えられたものであることが強調された。そして、核兵器禁止条約の内容にふれ、この条約は包括的な核兵器禁止条約であり、核保有国も含めて多くの国々に批准を訴えていくこと、NPT再検討会議と連動して運動をすすめることの重要性を述べられた。そして具体的には、核兵器の非人道性を訴えながら、核兵器禁止条約の内容を広めること、さらに核兵器関連企業と取引のある銀行や会社を拒否していくことなど、今後の課題を提起された。

日本原水爆被害者団体協議会
（被団協）事務局次長
藤森　俊希氏

各国に核兵器の非人道性と核兵器の廃絶を訴える

藤森氏は1歳4ヶ月の時に広島で被爆し、4番目の姉が爆心地近くで被爆し行方不明になっているなど、家族の被爆の状況と被爆直後の実相を語られるなかで、原爆はいかに非人道的な兵器であるかについて訴えられた。そして1956年に「自らを救う」と共に「人類の危機を救う」という目的で被団協が結成された経緯と、その後、被団協が国連を始め世界各国に核兵器の非人道性と核兵器の廃絶を訴えてきたと述べた。そのことが今回の核兵器禁止条約に結びつき、さらに現在、核兵器廃絶に向けてヒバクシャ国際署名に取り組んでいることなどを話された。

林田氏は、核兵器廃絶の運動を一般化していくことが大切であり、そのためには、上から目線のお説教的な訴えではなく、現実的に今の日本や北朝鮮に核兵器が投下されたらどういう状況になるのか、広島・長崎の被爆の実相を思い起こしながら、一緒にイメージして訴えることが重要である、若者を目覚めさせるのではなく、大人が変わらないと運動は成功しないと強調された。

ICAN国際運営委員
ピースボート共同代表
川崎　哲氏

NPT再検討会議と連動して運動をすすめることが重要

ヒバクシャ国際署名キャンペーンリーダー・被爆３世
林田　光弘氏

核兵器廃絶の運動を一般化することが大切

とっても勇気付けられた

参加者からは、これからヒバクシャが亡くなられていく中で、被爆の実相を訴えていくためには、被爆の証言を残していく活動をしていく必要がある、日本政府を変えるためには、地元の政治家や国会議員にもっと訴える必要があるなどの提案がなされた。これらに対して、シンポジストからは、しんどいと思う運動は決して広がらない、間口を広げながら多くの人々と楽しい運動にしなければ運動が発展しない。核兵器の非人道性をさらに明らかにしていく上で、医療の専門家である医師への期待が表明された。さらに12月10日のノーベル平和賞の授賞式には、もう一度世界がICANと核兵器禁止条約に注目する時期がくるので、その時に合わせて、どのような訴えをするのか、特に、反核医師の会の強みとして全国に組織があり、全国各地での活動への期待が述べられた。

参加者のアンケートには、「とっても勇気付けられた」「今後、何をしなければならないのか、示唆に富んだシンポジウムだった」「核兵器禁止条約に反対している日本政府を変え、批准させていく運動をすすめる必要がある」などの感想が多数出された。

第28回「核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい」メッセージ

IPPNW 日本支部代表支部長
日本医師会長、世界医師会長
アジア大洋州医師会連合（CMAAO）会長
横倉　義武

はじめに、反核医師の会の結成30周年おめでとうございます。そして、貴会が参加するICAN（International Campaign to Abolish Nuclear Weapons）のノーベル平和賞受賞をお祝いすると共に、その直後に開催されるこの「つどい」に大きな意義を感じております。（中略）

最近の世界情勢はますます混迷を深めており、われわれは、核兵器はもとより生物・化学兵器等の大量破壊兵器への脅威など厭うべき現実に直面しております。世界医師会の「ジュネーブ宣言」にも明示されているように、こうした情勢の中で、医療専門職として、われわれは世界の人々の健康を維持し、その向上に努めることを使命としております。核兵器による悲劇は人類の歴史に二度と刻まれてはいけない事実であり、その事実を医師の立場から世界に発信し続ける義務があります。世界で唯一の被爆国として、わが国は核兵器の非人道性や被ばくにより苦難を背負った人々の苦しみなどを世界に訴えてまいりました。その積極的な活動主体として、反核医師の会やIPPNW日本支部の方々を中心とした長年の献身的なご努力に心から敬意を表したいと思います。

本つどいの参加者の皆様の熱意と努力に改めて敬意を表するとともに、この会議が、内外での活動実績の上に立って、世界の核実験・核兵器廃絶の動きを大きく後押しする機会となるよう切に期待いたします。

HEALTH through PEACE

第22回核戦争防止国際医師会議世界大会概要報告

常任世話人　永瀬 勉

核戦争防止国際医師会議（ＩＰＰＮＷ）の大会が、２０１７年９月４日から3日間、イギリスのヨーク大学で開かれた。この大会は、ＩＰＰＮＷとＭｅｄａｃｔフォーラムとの合同で開催された。テーマは、『国際的保険医療コミュニティとして、戦争／軍事主義／国際不安に立ち向かう』（＝"Confronting War,miritarization and global insecurity as an international health community"）。世界35カ国から医師／歯科医師／医学生／医療団体をはじめNGOの代表ら約５００人が参加した。反核医師の会からは、会員、事務局等含め計31人が参加した。

全体会で、共同代表のティルマン・ラフ氏は、「核兵器禁止条約が採択されたことを私たちはとても喜んでいる。今回の条約は、初めて核兵器が違法であると言うことを明らかにした。しかし、条約はできたが、私たちの使命は終わっていない。２００７年にＩＣＡＮ（核廃絶国際キャンペーン）が始まり、ＩＰＰＮＷはこの運動の大きな役割を果たした。一旦、核戦争が起こったらどうなるのかということを明らかにしてきた。この核禁条約で廃絶に向けて核兵器国、核兵器依存国に圧力をかけていく。アメリカと北朝鮮、今、偶発的を含めて、冷戦後最大の危機になっている。平和を求める中でしか、人々の健康を守ることが出来ない。と」挨拶した。

ティルマン・ラフ氏

他氏から、「今回の条約は、核兵器の全てを禁止する包括的なものだ。今回の条約によって核兵器の被害者に目が向けられた。現在、核に依存している国でも条約に参加することが出来る。核保有国、依存国を人道上の観点から議論に参加させていくことが重要だ」との発言があった。ピースボートの川崎哲氏は、米朝間の緊張が高まっているが、この解決のためには政治的解決が必要だ。北は国体の維持の保証を求め、アメリカとの対話を求めている。などと発言。

反核医師の会を代表して、大前比呂思氏が、「原発事故後６年を経た福島の状況と今後」と題して発言した。

閉会総会では、日本医師会会長で、ＩＰＰＮＷ日本支部代表支部長の横倉義武氏が世界医師会を代表して挨拶し、「核兵器に対して強い態度で臨む。出した声明の中に核廃絶も含まれていた。その気持ちを各国政府に送った。被爆者の苦しみを忘れてはならない」と述べた。

11月４、５日に東京で開かれる「反核医師のつどい」に向けて、ティルマン・ラフ氏のビデオメッセージを録画した。

なお、10月６日、ＩＣＡＮが今年のノーベル平和賞に選ばれた。核禁条約の採択に向けて市民社会の一員として果たした役割が評価されたものだ。実にすばらしい出来事だ。

ＩＣＡＮ（核兵器廃絶国際キャンペーン）は、核兵器を禁止し廃絶するために活動する世界のＮＧＯ（非政府組織）の連合体。スイスのジュネーブに国際事務局があり、2017年10月現在、101カ国から468団体が参加している。日本からの参加団体としてはピースボートの他、核戦争に反対する医師の会、創価学会インターナショナル、ヒューマンライツ・ナウなど７団体が参加している。

ＩＣＡＮは、核戦争防止国際医師会議（ＩＰＰＮＷ）を母体に2007年、オーストラリアで発足した。2011年にジュネーブに国際事務所を設置して以来、核兵器の非人道性を訴える諸国政府と協力して核兵器を国際法で禁止するキャンペーンを世界的に展開。メディアやＳＮＳも活用し広く情報拡散を行い、メンバーは比較的若い世代が多い。

ＩＰＰＮＷヨーク大会に参加した
ベアトリス・フィン氏（ＩＣＡＮ事務局長）の発言

核兵器禁止条約により「核兵器は非人道的なもの」との規範を示せた。核保有国に対して、核兵器の廃絶を訴え、１日でも早く核のない世界を実現しなければならない。７月７日に採択され、９月20日から署名が始まる。この採択に参加しなかった国もあるが、すでに100カ国以上が署名に向けて努力しており、なるべく早い発効を求めたい。

第22回IPPNW世界大会に参加して

茨城保健生協　茨城反核医療人の会　大前　比呂思

第22回International Physicians for Prevention of Nuclear War（IPPNW）世界大会は、今年の9月4日から6日にかけ、イギリスのヨークで開催された。私は、その会に、反核医師の会（PANW）のメンバーの一人として参加し、発表の機会まで得ることができた。深く感謝すると同時に紙面を借りて簡単な報告をしたい。

PANWのメンバーも多く参加する核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）が、ノーベル平和賞を受賞する契機となった核兵器禁止条約の採択は、7月7日の国連総会でなされた。9月のIPPNWヨーク大会には、その熱気がそのまま会場に持ち込まれた。また、今回のIPPNW世界大会は、Health through Peaceの大会スローガンのとおり、核兵器のみならず、紛争と難民・貧困・ジェンダーなど、戦争や暴力の問題を、広くカバーし、国境なき医師団（MSF）のようなNGOはもちろん、赤十字国際委員会（ICRC）や国連率下のWHOまでも参加する大規模なものとなった（写真）。そして、国連総会での核兵器禁止条約の採択により、紛争当事者の間で中立を要求されるMSFやICRCが、本会に参加し役割を果たすのが容易になったとの指摘が、複数の大会関係者からあった。

PANWからは、当初「原発事故後6年を経た福島の状況と今後」というタイトルでのワークショップの開催要望を出したが、前述した幅広い分野で演題を募集するという方針のもと、「原子力・核問題と公衆衛生」という合同セッションでの発表となった。そのセッションでは、核関連施設からの放射性物質漏れから、核戦争後の環境変化、核の冬までを含めた、幅広い演題が論議され興味深かったが、やや議論が散漫になる傾向もみられたのは、今後の大会を考えるうえでの検討課題と思われた。

実際のPANWからの発表では、福島県民健康調査における甲状腺検診の結果が一番の話題となったが、生活基盤が整わず、健康を守る診療体制が不備な状況でも、帰還を強制するような政府の動きについても、重点的に報告した。若年者を対象にした超音波検査による甲状腺検診では、それこそ、従来の臨床例の報告からすると何十倍となるような甲状腺癌の報告がなされているが、その評価については、見解が大きくわかれている。一部の病理学者からは、超音波検査を導入することで、生涯臨床的には問題とならない潜伏癌も拾っており、何万人という集団で、甲状腺での自然発癌の発生経過を観察しているだけという主張もなされた。一方、同じデータを用いている疫学者の間でも、過剰発癌の否定からわずかな過剰発癌、アウトブレイクと言える水準とまで、大きく見解が割れるのも、なかなか理解しがたい。

ところで、レベル7の福島事故がおきる前は、日本での大きな原子力関連事故と言えば、99年茨城県でおきたレベル4のJCO事故だった。その後、JCO事故が起きた地域では、1mSv以上の過剰被ばくが疑われる全ての年齢層の住民に対して、1年ごとに一般健診に近い無料検診が行われてきた。そこで、福島事故後の対応については、若年層の甲状腺検診を続けつつも、茨城県などの北関東も含め、広い年齢層と地域での一般健診を行うべきではないかと主張した。さらに、避難者に対する支援打ち切りをちらつかせるような、強制帰還の動きをやめる一方、居住している人や帰還者のこころのケアについては拡充すべきとも述べたが、IPPNWドイツ支部からの参加者からは、そのような主張自体、甲状腺癌のアウトブレイクの事実など、早急に対処すべき問題から眼をそむけさせるものだという強い反論を頂くこととなった。

私自身、98年からカンボジアで医療協力に参加しているが、今回の発表は、クメールルージュの拠点だった地域でとった、メコン河の夕日を背景に農作業にいそしむ住民の写真でしめくくった。Health through Peaceという今大会の精神、保健医療活動の基礎には平和が必要だが、保健医療活動による平和の希求もあわせて重要という認識が、早く世界の医療人の共通認識となって欲しい。

IPPNW 参加報告

大阪民医連研修医（西淀病院所属）原澤　俊也

原

2017年9月4日から6日まで、英国北部の都市であるヨーク（York）のヨーク大学にて開催された、第22回国際反核医師の会（IPPNW）世界大会に参加した。今回の大会は、"HEALTH THROUGH PEACE"を主題として開催されたが、参加を通じて私はこれを『平和によってもたらされる健康』と解釈した。

今大会において一番大きな話題は、核兵器禁止条約（the Nuclear Weapons Ban Treaty）についてであった。この内容については、皆様ご存知の通りであるため詳細は割愛させていただくが、『核兵器は人道的に許されないものと烙印付け（stigmatize）する』という表現は、とても印象的であった。また医療者は、核兵器によってもたらされる被害を科学的に把握し、それを説明していくことができる存在であると繰り返し述べられており、襟を正される思いであった。

なお、核兵器廃絶のみならず、『紛争や暴力を防ぐためにはどうしたら良いのか』という視点について、数多くの話題や議論がなされた。この中で、特に"シビレた"というか、深く心に刻まれた言葉がある。「退役軍人は、戦争の現実や悲惨さを伝えるためにいる」―アフガン戦争にも従軍した英国の退役軍人の言葉である。経験しているからこそ伝えられる、伝えるべきである、そういった強い信念を感じた。私は医療者として、これから何ができて、何をすべきなのか、真剣に考えていかなければならないと痛感した。

私は民医連に研修医として所属している。その綱領には『戦争反対』『核兵器廃絶』と明確に掲げられている。日本において、この様な考え方は、残念ながらマイノリティだ。でも、志を共にする医療者は世界中におり、彼らと手を携えて共に行動できることを実感することができた。これは、何よりの収穫であったように感じる。

読書案内

「生きる」ということが、人権なんです

早川　純午（愛知・名南ふれあい病院）

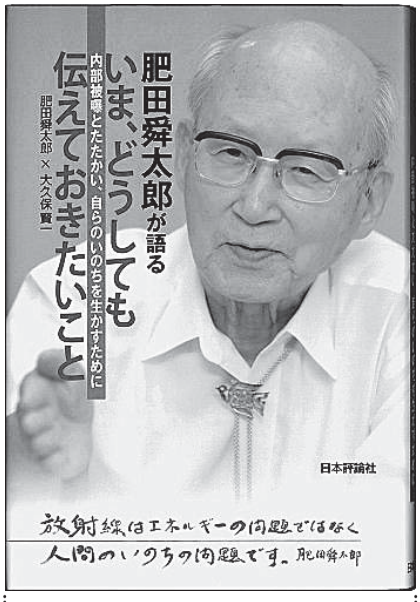
『肥田舜太郎が語る今どうしても伝えておきたいこと』を読み、『原爆体験と戦後日本』直野章子 で被爆体験の継承は可能かを考えた。

前者は、対談と、聴き役の大久保氏のわかりやすいまとめで整理されて、終章にどうしても伝えたいことが集約される。そして「核エネルギーとどう立ち向かうべきかの答えを、探し出すためのヒント」の本だという。

経歴では軍国主義を「具体的に」嫌になった医学生時代、「僕はそうゆう人間を見ると関心を深く持った」ハンセン病患者との交流の軍医時代、原爆投下の4−5日後に発熱し、輸血を受けて助かった経験が記されている。「あの時に、広島で見た光景は、たとえ記憶から消し去ることがあっても、原子爆弾への怒りは決して消えることはない」「原爆なんかに殺されてたまるか、生きてやる。どこまでも」生きている間、何か被爆者のためになることをしよう」と被爆体験者としての使命が語られる。

不思議な死とブラブラ病を追求し、1975年にそれが内部被曝と理解し、この内部被曝を知らせることが被爆者運動にとっても重要だと強く提起し（飯島宗一氏が内部被曝について大反対だったとあり驚いた）、米国が被爆の研究全て独占し、放射能で苦しむ人はひとりもいないとして日本政府も実相を隠蔽し、原子力の安全神話に突き進むなかで歴史状況は、被団協や原水爆禁止運動にも強く影響してきた。肥田氏はこれらの運動方針などへの鋭い指摘も随所で見られる。「僕は被爆者と60年付き合ってきて「問題は皆が望んでいた、〝死にたくない。長生きしたい〟が、他人に頼ってもどうにもならない」。だから「自分の健康は自分で管理する」「今、自分の主人公になれ」と、これによって人権意識が生まれるというのだ。これが一番言いたいことと思える。

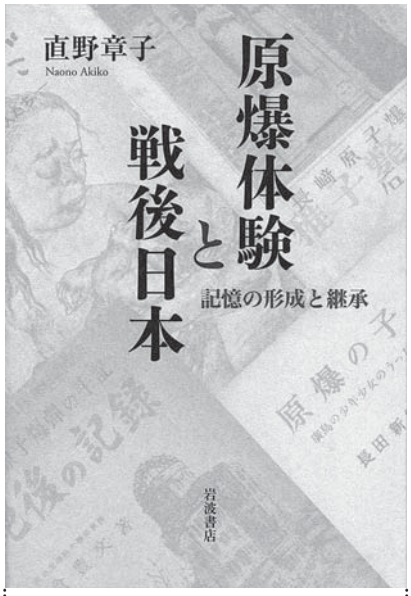
後者『原爆体験と戦後日本』では、「被爆体験」は原爆後の言説活動の所産であって、被爆者だけでなく同伴者とによって形成されたものととらえ、その理念を引き継ぐことだとしている。時代の中での運動については前者と似た文脈も見られ、一緒に読むのは良かった。



『肥田舜太郎さんが語る「いま、どうしても伝えておきたいこと」』

肥田舜太郎／大久保賢一　著

日本評論社（2013／2／5）



『原爆体験と戦後日本』

直野章子著

岩波書店（2015／7／25）

訂正

8月25日発行の反核ニュース第65号2面に掲載しました東京反核医師の会の活動報告に関する記事にて、渡辺吉明先生の役職名を「代表委員」と記載しましたが、正しくは「運営委員」でした。訂正してお詫びいたします。

会費納入のおねがい

反核医師の会は、会員のみなさまの会費と、主旨に賛同いただいている募金によって運営しています。

会費納入のほど、よろしくお願いいたします。

個人会員（医師・歯科医師、医学者）　10,000円
医・歯学生会員　1,000円
賛助会員　1,000円

振込先

◇りそな銀行　新都心営業部　普通　1557502
「反核医師・医学者の集い」
◇ゆうちょ銀行　（他銀行からの振り込みの場合）
〇一九支店
当座　0056764　「反核医師・医学者の集い」
◇郵便振替　00170−7−56764
「反核医師・医学者の集い」

ガンマ線

「Shame on you」は、米国大統領に反対する集会での頻出フレーズである。日本語では一般に「恥を知れ」と訳される。核兵器禁止条約に参加もしなければ被爆者を尊重することもしない日本の安倍政権にも、等しく投げかけられるべき言葉である。

しかしながら、安倍首相に「恥」という概念が存在するのか。日本の「恥の文化」を有名にした「菊と刀」によれば、恥ずかしい行いをしてはならないという規範ではなく、恥ずかしいことを人に知られまいという隠蔽文化であるらしい。悪事が露見する前に腹を切ってしまう時代劇の武士を美化するつもりはないが、放射能汚染水をコントロールできていると大嘘をついたり、口先だけの核廃絶を唱えてみたり、と、現首相は恥とは無縁、隠蔽は他人任せの人物である。

さらに言えば、「知れ」と言ったところで、反知性主義などと揶揄されるほど知識や経験をないがしろにしている現政権の中枢には難しい注文だろう。

つまり「恥」も「知る」も、安倍首相には通じないということ（トランプはどうなのだか知らないが）。「核兵器を持っているというだけで恥ずかしい」という世界をめざす私たちは「恥を知れ」ではなく、明確に言わなければならない。安倍政権、退陣を、と。